大智禅師偈頌

鳳山山居

（その四）

―心の旅路―

大智禅師山居の郷より

大智禅師偈頌

鳳山山居（その四）

草屋単丁二十年　草屋単丁　二十年
未持一鉢望人煙　未だ一鉢を持して　人煙望まず
千林果熟携籃拾　千林　果　熟すれば　籃を携えて拾う
食罷溪辺枕石眠　食罷（じきは）　溪辺　石を枕にして眠る

この一首は鳳山山居八首の中、最も人口に膾炙されている一頌であり、大智禅師が鳳儀山に約二十年間山居せられたことを歴史的に証明する唯一のものといわれている。

武重公の寄進状により聖護寺が開創された年とするなら、それは延元三年（一三三八）で、禅師五十才の時にあたる。

而て、禅師の二十年山居という間には、菊池氏の世代交替や状勢の推移によって、禅師の身辺もその前後に可成りの状況変化が余儀なくされたようである。

武重公がその熱烈なる信仰を表明して寄進状を納められ一族悉く挙げて禅師の命に違背せ

ずと誓った数々の起請文から察すれば、当初の聖護寺は参禅問道の客も絶えることがなかったのではなかろうか。

しかし、武重公の没後ともなれば、次第に事情も変っていった。興国二年（一三四一）菊池隈府城下に正観寺が建立され臨済宗蘭溪下の大方禅師が迎えられていること。特に正平三年（一三四八）に懐良親王を迎えるにあたり、時の当主武光公は志気をたかめ地歩を固めるとともに一段と正観寺に傾倒するようになったこと。更には「因事」何かの事情によって、鳳儀山を下ろうと決意されたこと等である。

曽て南能の　世難を避くるに慣って
暫らく雲水を辞して　人間に下る
一瓶一鉢　縁に随って住す
到る処　無心なれば　便ち是れ山

中国の第六祖慧能（えのう）禅師が法難世難を避けられて漁父樵翁の仲間に入られて十五年間消息を絶たれた先例がある。事情に因って、わたしも暫らくこの山を離れよう。また、

幸に福田衣下の身となりて
乾坤かちえたり一閑人
縁あれば即ち住し　縁なければ去る
清風の白雲を送るに一任す

縁有れば住し、縁なければ去る。清風の白雲を送るが如く淡々とした観自在の境涯。従来する所もなく亦、去る所もない。これを如来と名づく。

このような因事三首（一首略）によって、菊池一族の象徴であられた禅師の二十年山居の終焉の模様が概略察せられる訳であるが、頌句の表面のみをみて憶測することは当らない。

さて前置きが長くなったがこの一首についても我々後学は道元禅師のお示しに参ずべきである。

古来、学仏法の人、あるいは草庵に独居し、あるいは精舎に共行す。独居のともがらは多くは鬼魅魍魎（キミモウリョウ）に侵さる。共行の人は天魔波旬（はじゅん）にみださるることまれなり。いまだ仏法の通塞を明らめずして空しく至愚の独居を守る、あに錯（あやま）りに非ずや。いま常に叢林の長連床上にあって昼夜弁道すれば、魔子もみだすことをえず、

鬼魅も侵すことをえず。まことにこれ善知識なり、またすなわち勝友なり。

というご注意がある。

草屋単丁を山谷独住生活と鵜呑みにしてはならない。

「吉峰の路は鳳山の塢(う)に入る」と、禅師は正法眼蔵の到来をよろこんでおられる。吉峰精舎で示された道元禅師の「正法眼蔵」の生活をそのまま、鳳儀山に継承されようとしたのである。

道場を離れた独居生活を悦ばれたと受け取ってはなるまい。